

まれなかつた縣當局、町村役場、小學校、會社等の諸員に對しても併せて深謝の意を表し度く思ふ。(昭和四・一二・二〇)

富士山の標高に就て

陸地測量部

參考文獻(其二)

⑧ 保柳睦美 文化景觀の理論的研究 (地理學評論第五卷)

⑨ 長崎縣東彼杵郡誌 (長崎縣東彼杵郡教育會發行)

主題に關しては新聞紙の屢々報導せる處なるも何れも正鵠を缺くものあるを以て茲に大正十五年測量當時の狀況を記述して參考に供せんとす。

一、侵蝕作用と山頂

富士山は熔岩瘤及碎屑物の類層より成り山容は整然として雲表に聳え、其の最大傾斜線は對數曲線を成すと謂ふも山層は幼年期に屬するが故、風雨氷雪の破壊力に依る經年變化又尠からず、大正十五年震災復舊測量當時山麓の諸點に於ては毫も變化を認めざりしも、山腹の小富士及不淨ヶ岳三角點の如き山形を成せる者は其頂の碎屑は著しく喪失し標石を露出するに至らし

む、其量は四十年間に大なるものは約〇、六〇米に及べる者もあり、然して山頂の岩石地に在りては基準となるべき標識物なきを以て、疊に岩石の崩落せる證據に依り侵蝕作用を認むるも其量を知る事能はざりしを遺憾とす。

二、從來の富士山頂標高

從來富士山の標高としては陸地測量部發行地圖に標記されたる獨立標高三七七八米を以てせり、然して其決定法は明治十八年三等經緯儀に依り山麓の諸點より圖示の如く直規法に依る間接水準測量を以て先づ舊富士山四等三角點の標

高を算出し、次で明治二十年測圖の際之を基準として平板測圖道線法に依り山頂の標高を決定せり、故に此獨立標高には高度十五度乃至十七度に應ずる屈折係數の當否及平板測圖に伴ふ誤差を含有し、又其決定されたる單位は米に止まり隨て次項に示す新設三角點の標高とは大いに其精度を異にす。

三、新設富士山三角點の標高

古來山頂劍ヶ峰には其標高を標示すべき三角點の無かりしは蓋し名山として誠に遺憾なりしも、偶關東大地震あり之れが復舊測量の機に際し初めて設置を見るに至れり。

四、山麓及山腹の三角點新舊標高の比較
 新舊標高決定の基準として用ひたる諸點の標高を比較するに左表の如し。

點名	新標高	舊標高	比較差	備考
印野村猿	1037.1米	1037.6米	減0.5	
高丸尾	1377.0米	1377.3米	減0.3	新標高は直接水準測量にて決定
龍ヶ馬場	1340.4米	1340.5米	減0.1	同
小富士	1957.2米	1957.3米	減0.1	

不淨ヶ岳 1336.1米 1336.0米 増0.1

五、舊標高と新標高

新設三角點の標高と舊獨立標高とは其標示點を異にする事前述の如し、故に新設三角點の標高に前記〇・一五米を加用して新山頂の標高とし、之を舊標高に比較せば、新標高は一、五六米低下せるが如き状態を示す、此數量を考察するに山麓及山腹の諸點の比較差は前表に示すが如く、測定許容誤差の範圍にありて其低下を確認するを得ず、之れより推考せば山頂に於ても大なる低下なかるべし、翻て測定法より考ふるに舊標高は簡易法に據り且つ平板測圖の結果を併用して其決定單位を米に止む、之れに加ふるに四十年間の崩落變化も亦不問視する能はず故に此等を綜合すれば此差違は許容程度の者に屬し恐らく富士山の沈降を證する者に非ざるべし。

六、測量登山の概況

山麓に於ける三角點の捜査作業も一段落を告げたる大正十五年六月十七日登山には尙早たる

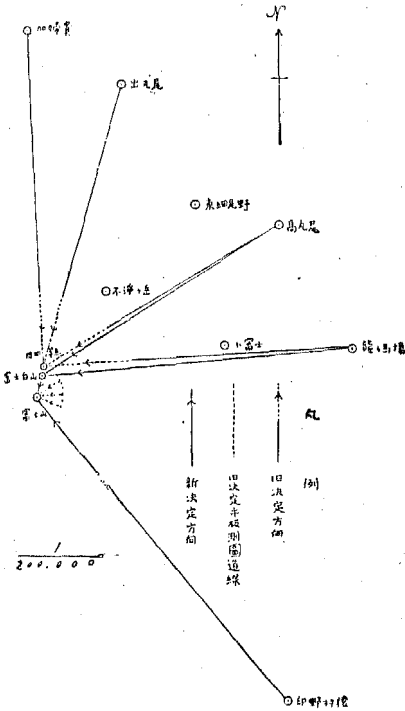
も劍ヶ峰實地踏査の必要に迫られ、須走口三合目(標高二三〇〇米)小屋を出發し、盤々たる残雪丈餘の中を頂上指して登攀す、此日天氣晴朗にして風は風ぎ山頂は目睫にあれ共八合目よりは所謂胸突八丁急峻にして、残雪は愈々堅くなりしを以て用意せる圓匙に依り足掛けを作りつゝ、五時間半にして北側頂上に達す、此日携帶せる氣壓計は三〇〇〇米にして其機能を失ひ、空氣の稀薄の度を増すに伴ひ一步に一喘し残雪深く埋れる石室の屋上に於て一息す、之れより外輪山を西に數丁四等三角點の捜査を終り劍ヶ峰に向ふ、峰の斜面は雪頗る堅かりしも携行せる鳶口に依り難なく山頂を極むるを得たり、然して山嶺の雪は風の爲め概ね拭はれ山麓に僅かの霧を認めたるのみにて豫定の調査を終る事を得、歸路は外輪山を東に廻り大宮口頂上淺間神社に至る、同所は凹地にして残雪尙深く烏居の頂を認むるのみにして此處より噴火口の内側懸崖を望めば直徑尺餘の氷柱無數に垂れ壯絶を極め寒氣凜烈たるを物語る、此時より天は次第に暗く

富士山の標高に就いて

暫らくにして濃霧と突風に襲はれ氷片と礫を浴びつつ北口頂上に至り板切れに坐し一氣に千餘米を迂り宿營地に歸著し得たるは痛快なりき。觀測作業は山頂に於ける天候の靜穩なる七月下旬より八月上旬を撰み、七月二十一日山頂に到着せり、時恰も登山の盛期に際し山頂の石室(旅館)は雜沓を極め居りしを以て淺間神社の東方高地なる塞の河原に至り堅牢なる空倉庫の一隅に幕營せり、天幕内の岩石は頗る暖かく時々蒸氣を吐き出し恰も暖房裝置を施せしが如く、棲宿には好都合なりしも氣壓は凡五〇〇耗にして沸騰點低く飯は常に半煮にして初めは苦痛を感じたり、山頂に於ける薪炭は山麓の部落より運搬するも補充困難なるが故中腹の枯木を採取せしめんと外輪山の外側を下らしめしに、間もなく拋棄されたる金剛杖を拾ひ集め大束となし負ひ來たり是より薪の補充は容易となれり、斯くして山頂に棲宿する事十餘日、白雲は常に山麓を圍らし時には強風に送られ山頂を襲ひ渦巻く密雲は岩頭に碎け囂々として凄然鬼氣迫るが

如き光景を呈する事ありしも、八月一日作業を漸く終り荷物の一部は板を利用し檣に擬し御殿場口より下れり。

標高決定に關しては可成近距離の諸點より誘求するを精度上有利とせしも、山腹の諸點よりは山の肩に遮られ完全なる視通を得られず、故に圖示の如く富士白山を仲介として山麓の諸點に關聯せしめ、三等經緯儀を以て直覘及反覘法に依る嚴密間接水準測量に依り富士山三角點標



高として三七七六、二九米を得たり、然して標石上面を最高頂と同一水準面にあらしめ、其標高をして直に山頂の標高を表現せしむるを理想とせしも、三角點敷地の關係上全く一致せしむる事能はず。富士山最高頂は本三角點の北方約十米を隔つる絶壁頂にして其比高は○、一五米なり。

次に新舊標高の決定關係を圖示すれば左の如し。